

丹波並木道中央公園のかやぶき民家は江戸末期に建てられた庄屋宅（旧中道家）です。公園近くの篠山市大山新から移築されてきました。

旧中道家は篠山市から丹波市柏原町に抜ける旧街道沿いにありました。江戸時代の後半には庄屋であったことが、「兵庫県史」や「大山村史」に記されています。

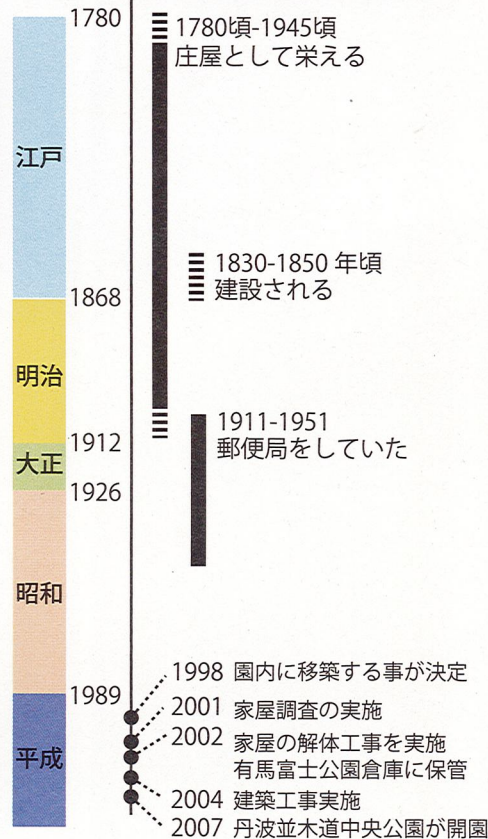
江戸時代後期、篠山藩には篠山城を中心として、東の「ホホカベ」、西の「ソノダ」という二つの大庄屋がありました。大山地区はその西地区にあたり、ソノダ＝園田家はこの大山地区の大庄屋でした。園田家は現在の大山宮にあり、江戸時代から苗字帯刀を許され、城からの命令伝達、年貢の割り当て、争いごとの解決などを任されていました。その次に大きな庄屋として、西尾・西垣・中道・中沢の4軒があり、その中でも、中道家は中心的な存在だったようです。中道家は戦後、この地域の小作枚が千石集まっていたほど、大きな庄屋で、母屋の周りにはたくさんの米蔵があったそうです。



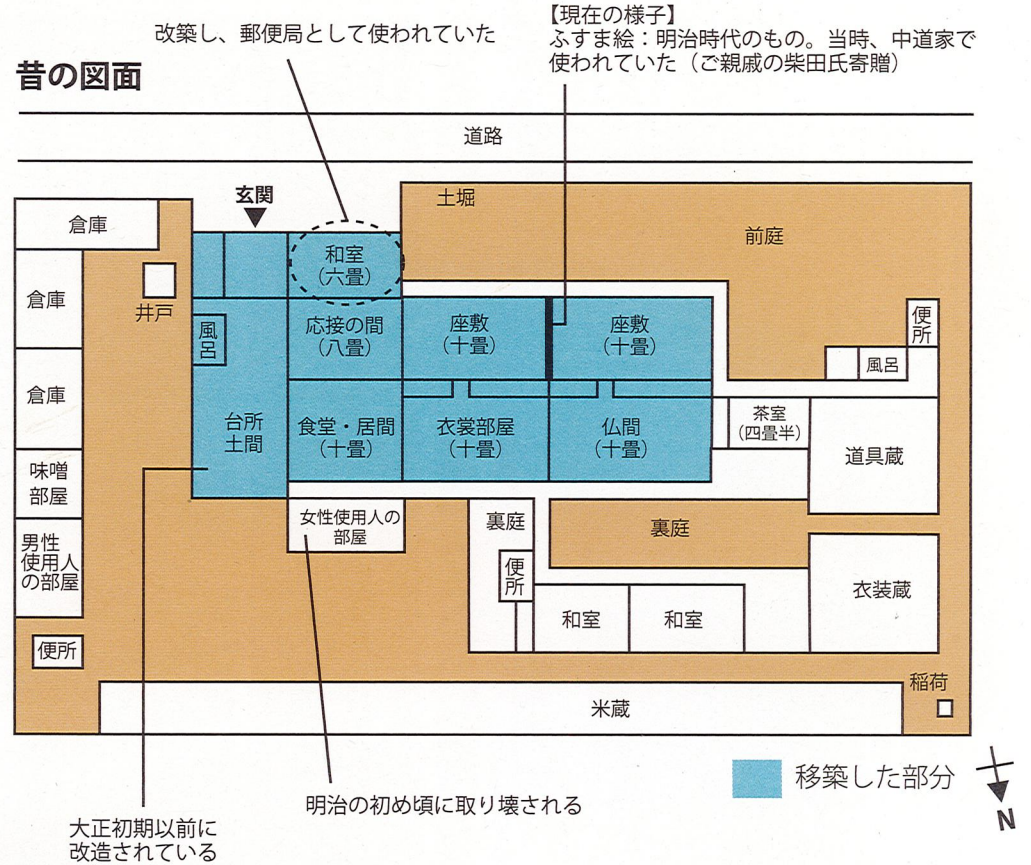
写真：かやぶき民家全景



中道家の歴史と古民家移築の経緯



昔の図面



旧中道家の特徴

旧中道家は明治時代以降に一般的であった六間取り（6つの部屋で構成されている形式）です。しかし、上部の規模に比較して土間面積が小さく、直接農耕作業と分離されていることがうかがわれます。また式台付き玄関が2間と規模が大きく、次の間になる座敷の造りが、書院風の造りとなっていますが、随所に数寄屋風が取り入れられています。建築時代が江戸末期であり、身分の制限が取れ、自由な趣の表現を可能とした明治時代初期の特徴が随所に感じられる造りになっています。

【書院造り】室町時代から近世初頭にかけて成立した武家を中心とする住宅の様式。床の間、棚、付書院を備え、座敷を荘厳する造りが特徴。

【数寄屋造り】茶室風の様式をとり入れた住宅の様式。書院建築が重んじた格式・様式を極力排しているのが特徴。